

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	杉山由里子
論文題目	ブッシュにもつれる生と死 —サンの過去・現在・未来の構築—		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、ボツワナのカラハリ砂漠及びオカバンゴデルタ周辺で狩猟採集を続けてきたサンが、再定住政策や牧畜民ツワナの文化を基盤とした社会変容の中で自分たちの死、これまでそしてこれからの生き方とどのように向き合っているのかを明らかにしたものである。</p> <p>第Ⅰ部では、現在のサンの葬儀と埋葬の実践を分析することで、再定住地での新しい生き方に対処しかつツワナ式の葬式や生活が新しい慣習として広がりつつある様子を明らかにした。遊動時代のサンの埋葬は断片的に描かれ、特に、埋葬後に居住地を放棄すること、また故人を簡素に埋葬することは、サンの生活の特徴である平等社会を示す行為として取り上げられた。しかし、現在のサンは、開発計画によって設けられた再定住地に墓地を持ち、かつお金をかけて故人を埋葬する。これは、再定住地における(1) 社会集団の構造、(2) 経済格差の問題に対処するためである。再定住地ではキャンプが崩壊し、社会集団形成の基盤が失われた。その結果、人々は話し合いによって埋葬場所を選択することで、再定住地での親族関係や人間関係を再編成していた。これを通じて明確化される新たな社会集団は、近年拡大した経済格差と深く結びついている。平等社会と言われてきたサンが、ツワナ式の葬儀こそ望ましい埋葬とすることで、新しい土地でのあるべき生活を試みているのである。</p> <p>第Ⅱ部では、再定住地においてツワナの葬儀が一見広く受け入れられているように見える一方で、サンの人々が個人的には今の生き方や死に方に納得していない様子、その記憶と感情を共有する「私たち」として繋がりつつあることを明らかにした。サンは、遊動時代にはブッシュでの経験を基に自然の中で生じた異質さを感じ取り、人の死の発生と重ねて理解していた。一方、現在では彼らがブッシュでは経験したことのない再定住地での死に方の異質さが顕著となっていた。公的な空間とみなされ適切な行為が求められるツワナ式の葬儀において、それにそぐわない行為や発言がサンの葬儀では多く見られる。大切な仲間を失ったことがかつての生き方と死に方を失ったことと繋がり、サンを開発計画の恩恵を受けた「国民」にしようとするボツワナ国家の政策とは異なる形で、サンとしての集合的なアイデンティティが形成されつつあるのである。</p> <p>第Ⅲ部では、他民族との交流による弔い、特に死後の世界観の再編について考察した。遊動時代は、埋葬後の居住地の移動／歩みによって死から時間的・空間的な距離を取っていた。サンの中でもブガクウェの生活域は水が豊富な生産性の高い土地で</p>			

あったため、他民族の流入や感染症の蔓延、また政府の土地開発に巻き込まれながら生きてきた。こうした環境下で進んだ定住化の過程をブガクウェの語りから再構成し、人々が新しい埋葬実践（薬）を取り入れていった様子を描いた。原野での経験と深く結びついた想像世界で死の発生を理解していたブガクウェにとって、薬の導入は、死者が絶対的存在となる想像世界での死の理解へと変化していった。また、個別に記憶されていた死者が、集団的で抽象的なものに変化したことで、「死者」についての感情のイメージは、サンが1) どのように生きるべきかという社会的規範や未来を共有すること、及び2) どのように生きてきたかという感情や過去を共有することにも利用されるようになっていた。

以上から本研究では、サンが一見するとツワナ式の葬送儀礼を導入することで国民としての統合政策を受け入れているように見える一方で、そうした実践に伴って個人的なわだかまりの感情が表出し、それを共有することで集合的な感情が醸成され、サンとしてのアイデンティティが創造されつつある様子、その過程で死者についての感情のイメージが利用される様子を明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

南部アフリカの狩猟採集民・先住民として知られるサンは、その特徴的な歴史、生業、言語などから、様々な分野の研究者のみならず一般の人々からも多大な注目を集めてきた。我が国でも、1960年代に田中二郎氏がパイオニア的な研究成果をあげて以来、人類学や言語学の豊富な研究の蓄積がある。しかしながら、サンの死を正面からとりあげた地域研究はまだほとんど行われておらず、基礎的なデータの蓄積とその理解についての理論的枠組みの構築が求められている。こうした状況で本論文は、サンの定住化に伴う生と死をめぐる変化への対応(第I部)、親しい人々の死についてのわだかまりの感情(第II部)、他民族との交流に起因する死後の世界観の再編(第III部)に着目した。そして、これらに対応した、(1) シンプルすぎることによって分析的にとらえられてこなかった遊動時代の弔いについて再考する、(2) 新しい葬儀を取り入れていく中で、どのような社会集団が形成され、とりわけ経済格差の問題をどのように解消しているかを明らかにする、そして、(3) ツワナ式の社会規範に回収されない、サンの個人的な感情とその共鳴を通じた新たな集合的アイデンティティの形成過程を解明する、ことを通じて、サンの死と生についての包括的な理解を提示しようとするものである。

本論文は、以下の3点においてアフリカ地域研究に重要な貢献を行っている。

第1の貢献は、詳細な民族誌的記述を通じて、サンの死と生に関するとらえ方とその変化の実態を明らかにしたことである。サンの死についての先行研究が進んでいなかった大きな理由の一つは、それが独自の複雑な儀礼を伴わないために、サン研究の主流をなし、制度化された社会的活動の記述・分析を重視してきた社会・文化人類学の研究史において周縁化されてきたことにある。これに対して本論文は、グイ／ガナ及びブガクウェ(いずれもサンの下位集団と位置づけられる)における長期のフィールドワークを敢行し、対象集団の人々と寝食を共にすることによって、その死と生についての見方を詳細に記述し、これに関するイメージを刷新することに成功している。

第2に本論文は、ボツワナの近代化政策の成否を問うための貴重な事例研究を提供している。サンの再定住化には、ボツワナ政府の国民意識を育成し、近代化を進めたいという意図が反映している。これは事実上、圧倒的多数派であるツワナの生活様式を導入することで、サンを大勢に同化しようというものであった。しかし、本論文が対象集団に深く関わることで明らかにしたサンの死を巡るわだかまりの感情とその共鳴は、政府の意図に反してサンの集合的なアイデンティティを創造する方向に働いている。こうした分析と考察は、上記のボツワナ政府のねらいが貫徹していないことを露わにし、国内外の政治的なアクターがこれから進むべき道を考える上で重要な資料となるだろう。

第3の貢献は、アフリカ地域研究と死生学を架橋する先鞭をつけたことである。社会科学の一翼をなすアフリカ地域研究は、主に社会的制度に注目することで社会的秩序が

どのように可能になっているのかを論じてきた。一方、死生学は人間にとって根源的な問題である死との向き合い方について、当事者の視点から理解を深めることを旨としてきた。本論文は、サンの死についての規範や実践を巡る集合的な感情と個人的な感情の往還的な相互作用に注目することで、異なる視座から行われてきた議論をユニークなかたちでつなげる新たな理論的視座を導入している。今後さらなる関連データの収集と分析を積み重ね、この議論を検証・精緻化していくことにより、いずれの研究分野にも理論的貢献を行うことが可能になるであろう。

このように本論文は、サンの死と生についての新しく、かつ重要な事例研究を行うことを通じて、アフリカ地域研究に優れた学術的貢献を行った。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また2023年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。